

宇田川榕菴が活躍したのは、杉田玄白らが『解体新書』を刊行してから50年余り過ぎたころです。すでに蘭学は医学にとどまらず学問のあらゆる分野へ広がり、榕菴も薬学や植物学へと研究を進めています。今回は、榕菴と当時は未知の学問だった植物学との出会いを紹介することにしましょう。

宇田川家の養子となった榕菴は、最初に医師の基礎教養となる漢方医学や本草学を学びました。本草学とは、植物や動物、鉱物の性質を調べて、薬としてどのような効能があるのかを明らかにする学問です。多くは植物でしたので、薬の本になる草、ということでも本草学といわれていました。

幼いころから植物に興味のあった榕菴は、実際に山野に分け入って草花を調べたり、時には玄真に付いて薬草の研究会にも参加して、さらに植物への関心を深めていったのです。

そんな時、榕菴はシヨメールの『家庭百科事典』を読んでいて、西洋には日本とは全く違う植物の研究方法、「植物学」があることを知ります。

植物学では、本草学のように薬になる植物だけを取り上げるのではなく、植物すべてをその形状で分類し、顕微鏡で構造を調べて、植物も動物のように呼吸をしていることや受粉によって発生する仕組みなどが研究されていました。

これに驚いた榕菴は、さまざまな蘭書を調べ、植物学の概要を簡潔にまとめて『蕃多尼訶経』(1822)として刊行します。

それからさらに12年の歳月を掛けて、ついに天保5年(1834)に日本で初めての本格的植物学書『植学啓原』(全3巻)を刊行しました。こ

洋学博覧漫筆

～榕菴と植物学の出会い～

の書には、美しい色刷りで植物の分解図や顕微鏡で拡大された細胞の図などが掲載されています。

序文を頼まれた同じ津山藩医の箕作阮甫も「これまで日本には本草学はあったが植物学はなかった。榕菴がアジアに初めて植物学を紹介した」と、惜しみない賛辞を送っています。

私たちが使っている「花粉」「繊維」などの植物の用語は、実は榕菴がオランダ語を翻訳した時に作った言葉です。榕菴の功績は今も身近なところに生きているのです。



▲『植学啓原』(津山洋学資料館寄託資料)

※透かしの家紋は右が眞作家、左が宇田川家のもの

4月中のひとの動き

人口	108,983人(前月比+85)		
男	51,951人(同+34)		
女	57,032人(同+51)		
世帯	43,724世帯(同+109)		
転入	521人	転出	452人
出生	97人	死亡	81人
(5月1日現在)			

広報つやまは、環境保護のため再生紙と大豆油インキを使用しています。読み終えた後はリサイクルにご協力ください



つ・ぶ・や・き

編集室

医師やがん経験者の取材を通じて、あらためて早期発見の重要性を気付かせられました。自分のがん検診の対象年齢になっていないだろうかと思いつながら、本紙5月号の折込チラシを見るとき：対象者でした。皆さんも確認してくださいね。(2)



誰にでも心に残っている本て必ずありますよね。『そうそう、こんなお話だったよ〜』と思いながら、自分が大好きだった絵本を子どもに読んであげられることはとっても幸せ。『つやまっ子に贈る100冊の本』、募集結果が楽しみです。(和)

加茂郷フルマラソンに始まり、勝北文化協会「若葉の祭典」、「久米の里」仙人まつり、阿波ふるさと祭りと各地域への取材が続いた1カ月。地元の人たちがさまざまな形でかわり、地域を盛り上げる熱い姿！感動でした。(＆)



つやま 広報
TSUYAMA CITY
Public Relations Magazine

6月号
平成21年
2009
656号

編集・発行 (毎月10日発行)
津山市総合企画部市長公室(市役所3階)
〒708-8501 岡山県津山市山北520番地
☎0868-23-2111(代) ☎0868-32-2152
Eメール kouhou@city.tsuyama.okayama.jp

☆広報つやまはホームページで閲覧できます。
<http://www.city.tsuyama.okayama.jp/>

